



香港便り その37

パ

レエが日本に本格的に伝わってきたのは大体100年ほど前だと言われている。ロシア革命で国を追われたダンサーたちがバレエ団を結成し来日公演をしたのがきっかけだった。その後、日本人バレリーナの活躍や、バレエ漫画の人気によってバレリーナは少女たちの憧れの存在になっていった。60歳になる僕の母もバレエ少女であった時期があったらしい。バレエ人口は高度経済成長期とともに確実に増えていった。昭和音楽大学の調査によると、2011年には日本のバレエ人口は40万人にも登った。しかし、10年後の2021年の同様の調査によるとその数は25万人となっている。40%近い急激な減少である。この10年間に海外で活躍するダンサーの数は増えたと思う。今や主要な世界のバレエ団には必ず日本人ダンサーがいるし、それもソリストやプリンシパルダンサーなど主要級の階級に多い。活躍するダンサーは増えた反面、バレエ人口そのものが減ってしまったのは何故だろう。

少子化や不況などいろいろな理由が挙げられるが、そもそもバレエ人口の大多数である女の子たちがプリンセスに憧れなくなったからだと僕は考える。

古典バレエといえば、プリンセスがプリンスに救われ、パステルカラーのきらびやかな衣装をまとって、プリンスと共にハッピーエンドを迎えるといったイメージだ。ストーリーは違えどもそこにあるのは守られるべきか弱い女性像である。しかし近年に入り、日本社会は変わりつつある。遅くとも経済的に自立した女性像というものがかっこいいという風潮が出来つつある。ディズニーが描く現代のプリンセスでさえ、自分で運命を切り開く強い女性たちだ。履いて、プリンセスのようなかっこを履いて、プリンセスのようになつてできるかどうかは今時の女子にとってそこまで重要でなくなったのかもしれない。スケートボードやサーフィン、ブレイキングなどで女子選手の活躍が目立つなか、現代の子供たちは女の子らしさを気にせずやりたいことをやる、もしくは家族から社会からも応援されるということが増えたのだろう。

先日、どこかの興行主が「バレエの妖精とプリンセス」というタイトルでヨーロッパからダンサーを呼んで子供たちをターゲットにバレエコンサートを主催していた。興行的に成功していたかは知らないが、プリンセスに憧れていたひと世代前の主催者が名付けたのだろう。バレエがもつ保守的なジェンダーロールにこのまますがつていくことは、バレエ人口のさらなる先細りにつながるのではないかと不安だ。

ところで実はバレエ総人口が急減した中、男子のバレエ人口は微増しているのだ。サッカーや野球などのメジャースポーツでさえ軒並み競技人口が減少している中の進歩だ。バレエは女の子のものといった偏ったジェンダーイメージを気にせず、好きなことをできる男子が増え、そして応援する環境が整いつつあるのだろう。僕が小学生の頃はバレエをやっているという周囲からからかわれていたもので、仲間の男子ダンサーが増えることは嬉しい限りだ。先人の男性ダンサーが数多くの障害がある中で繋いできたバトンを僕も大切に次世代に受け渡したい。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

バレエ人口が減っている。存続の危機？

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

